
欠け月を埋めるように

蛍火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欠け月を埋めるように

【Nコード】

N5382T

【作者名】

蛍火

【あらすじ】

両親を亡くし、親戚には裏切られ、拳銃事故に会い全身の自由を奪われてしまった少女。全てに絶望し、自身を諦めていた少女。もう解き放たれたい…。そんな少女がなぜか気づけば異世界へ。しかも、身体は元通り。一度、絶望した少女の心はカチカチでした。でも、異世界で出会う人々が、少女の凍てついた心を少しずつやわらかくしてくれます。少し魔法とかも使っちゃいます。よくある異世界トリップものです。自分が異世界もの好きなので、よくある展開てんこもり、作者が好きなパターンいっぱいです、すいません。

01 プロローグ（前書き）

異世界トリップ物が好きで読みまくってました。

自分の好きな要素でんこもりな小説書きたいなあと思い、ついに書き始めた次第です。どうなるのか、作者自身ちよつとわかりませんが、よければさら〜と見ていただければと思います。

01 プロローグ

どこでもいい

どこかへ行きたい

今をやめたい

もう 疲れたの

誰かに気を使うのも

使われるのも

この体さえ自由になるなら

そこの窓から飛んでやるのに

もう いいでしょ

なんにも考えたくないの

終わりにしたい

――じぼ

――じぼぼ

(――冷たい……気持ちいい……)

(つてなに!?)

じぼぼっ

(おぼれる!)

もがいた瞬間――

じぼぼっ

……

フツーに足つきました…

「…ふーあぶなかったー、足つくじゃない、あせったー。ってええ
???!」

.....

「…ジュジュ…」

呆然としたまま空を見上げてみる。
そよそよとそよぐ風。
鳥がぴちちと鳴いている。
気持ちいい…

「じゃなくて！とりあえず岸まで泳いで移動するか…ってあたしの…体…動いてる…？」

じつと自分の手をみつめる。

そっと指を動かしてみる。

きちんと思ったとおりにはらばらと細い指が確かに動いた。

水をすくうことだってできた。

すいと水の中で動かしてみる。
腕も足も思ったとおり動く。

「……………」

透明な涙があとからあとから頬をつたう。
…止まらない。

ここがどこなのか

なんでこんなところで水の中になっっているのか

今はそんなことどうでもいい

この指が腕が足が体が
思うように動いてくれるだけで

それだけで

もう…

01 プロローグ（後書き）

最後 余韻ある感じにしたかったんですー…。

難しいです。

文章っていつもものは。

02 大嫌い（前書き）

ユエの心の叫びって事で動作、「」なしにしてみました。

02 大嫌い

私、^{ハノユエ}葉野由枝は、3歳の時に両親が死んだ。

母方は親戚と疎遠で、父方の親戚に引き取られた。

その後、親戚の家で育てられた。

親戚の家には、私より5つと3つ上の男の子と、同い年の女の子がいた。

よくある話ー。

まあ、いじめられてた。

結構な期間だったから、まあ精神力、忍耐力ともにハンパないわ。

あたしが14になったとき、男兄弟2人が結託して、私を強姦したの。

悔しくて悔しくて仕方なかった。

でも、我慢してた。

でも、調子にのった2人は外で犯そうとしてきたの。

抵抗して抵抗して、やっとのことで逃げ出して、

飛び出した道路で大型トラックにどーん。

もうすごかったらしいわ。

血がいつぱいでたって。

…そこで、死ねたらよかった。

でもね、運の悪い事にぎりぎり生き残っちゃったの。

首から下は全部動かない。

できるのは小さな声でしゃべることだけ。

生きてる意味ある？

おじさんもおばさんも、そんな目でみてた。

病院の先生の前では不幸な目にあつた姪を心から哀れんでる。

そついう真似ほんと上手。

大丈夫、完全看護だし。

あたしはここで死ぬのを待つわ。

そんな目でみないで。

大丈夫よ、パパの遺産でお金はなんとかなるわよね。

それとも、使っちゃった？

大嫌い。

もううんざりなの。

だいつきらいなの。

もううんざりなの。

こんな…

…こんな、人生。

終わってよ、早く…。

願いが通じたのかな、その日の夜病院が火事になった。
煙がいつぱいになって、だんだん苦しくなっていた。

でも、あたし嬉しかった。

こんなに早く終わらせれるんだって。

遠のく意識で思ったわ。

パパ、ママ やっと会えるね。

02 大嫌い（後書き）

暗くてすみません。

ちよっと残酷描写になるのかな…

ユエ…ごめんね。

03 男だめなんです

気づいたら水の中だった。

驚いて水を少し飲んじゃった。

大丈夫かな…。

驚きついでおぼれるって思ったけど、全然足ついた。

ちょっと恥ずかしい。

思わず「足つくし!」ってつっこんじゃった。

「げほっげほっ。…なに…げほっ」

周りを見渡した。

…泉???

とっても澄んだ綺麗な水。

さわやかな風に揺らぐ緑。

かすかに聞こえる鳥のさえずり。

「……………」

うん、とりあえず岸に上がろう。
と、とどろくと足を踏み出す。

そこでふと気がついた。

足…動いてる。
指…も水を？ける。
腕も肩も…

あたしの体が…動いてる。

「……………」

そう認識した途端、涙があふれた。
ぼろぼろと涙がでてきて止まらない。

あたし、生きてる。
……。

「……っ。うーっ」

「泣いているのか…？」

「…っ」

突然聞こえた男の声。

反射的に振り向くと男がいた。

そう、男が。

生理的に男はだめだ。
受け付けなくなってしまった。

どんな状況であろうとも。

「おまえ…何をしている。こんなところまで。ともかくこっちへ。」
伸ばされた手。

男の手。

……無理です。

ふるふると首を横にふる。

色々と混乱して言葉が出ない。

「喋れないのか？こっちへこいといっているんだ、ほら」

差し伸ばされた手を避けるように、後ずさる。
つまずいて、転んだ。

大丈夫、ここは水の中。

だけど、パニックになっちゃった。
私としたことが。

「っおいー！」

その瞬間男が飛び込んできた。
この感じ助けようとしてくれるのかなー！。

でも、ごめんね。

男、だめなの…。

ここで私の意識は途切れた。

03 男だめなんです(後書き)

登場人物が2人になったです

04 幸せ（前書き）

書き方がさだまっておらず、申し訳ないです。
ちよっとずつ、慣れていけたらいいです…

04 幸せ

そよそよと頬を風がなでる。

真っ白なレースのカーテンが舞い上がる。

もう、誰よ。

窓を開けっぱなしにしたのは。

閉めたくても閉められないのに。

この腕は窓を閉めることさえできやしないのに。

折角、いい夢みたつてのに。

さいあくー。

少しむつとしながらそつと目をあける。

やはり窓が開いていた。でも想像よりももっと大きな窓が、想像よりももっと豪華なレースカーテンが舞っている。驚いて目をぱちぱちさせる。

「…あれ？」

頭だけを動かして見える範囲を見渡してみる。

絶対的に今まで毎日死を願っていた病室じゃない。

こんな豪華な壁紙や柱なはずないし、まずベッドがでかい。

「…ここ…どこ…」

夢の中でもつぶやいたセリフをデジャヴのように繰り返す。

その時ドアをノックして人が入ってきた。

「失礼いたします、まあ、お目覚めになられましたか？」

ベッドに垂れ下がっていた薄布を、無駄のない動作で纏めていく。

そしてその人の顔をみて私はぎよつとした。

明らかに日本人じゃない…

だって、髪の毛、赤毛っぽいし、瞳も茶色い…

洋服もメイド…？落ち着いたデザインだけど、コスプレ？外人…？
にしてはりゅーちよーな日本語ね…。

「お嬢様？お体の具合はいかがですか？」

「…え…変わりないです…」

「お熱はないようですね、それではお召し変えいたしましょうか」

「お召しかえ…」

「こちらにどうぞ、まずはお顔を洗いましょう」

「はあ…」

こちらへ…ってなに言ってるの、この人。

聞いてないのかな、起き上がる事さえできないってのに。

もーいつものおばさん看護婦はどうしたのよ。

「お嬢様…？」

ていうか、お嬢様ってなんの冗談なんだろ…朝からつかれるなあ。

これは説明がいるのだろうか…。

ガチャリ。

勝手にドアが開いてまた人が入ってきた。

「まあ、殿下。今しがた目を覚まされたところですよ。」

「そうか。おい。お前。なぜあのような場所にいたのだ。」

立ったまま思いつき見下ろされつつ言われた。

なんなんだ…意味がわかんないよー。

「…あの…」

「なんだ。」

「…ここ…どこですか？」

「…ここはリストレア国の城内だ」

「りすとれ…？」

なんじゃそりゃ…え、なに。どつきり…？

「…体はどうなのだ？」
とまどう私をほっといて女の人に問う。

「はい、お怪我もなくお熱も下がりましたので、大丈夫なようです。ただし栄養不足かもしれないかもしれません、とてもお痩せになってますから…」

それはそうだろう、人間動かなきゃ筋肉が減って痩せる。

ご飯、点滴とか流動食だったし、死にたくってそれも拒否ってたからそりゃ痩せる。

「そのようだな」

男が手を伸ばして肩に触れてきた。

男が

触れ…

そう認識した途端、

「いや！さわらないで！！」

手をばしつと叩いてベッドの端へ必死で逃げる。

もう、やだ。なんで触るの…怖いのに…。

無意識に身体が震える。目をつぶって震えが治まるのを待つ。

その尋常でない様子に、女の人が駆け寄る。

「お嬢様！？大丈夫ですか！？…殿下…なにを…」

「おい、何もしてないぞ？俺は」

「何もしてないのに、こんなにおびえられますか！」

「…いや…だが…」

「また落ち着いてからになさってください!」

横で女の人が殿下と呼ぶ人に食って掛かっている。
そんな事より…あたし、今…叩いた。

そんで起き上がってベッドの上を移動した。

自分で…?ぺたりと喉をさわる。お腹を腕を足を触る。

「…ない…」

体中に取り付けられていた器具が、管がひとつつも無い。

「…どうゆうこと…」

呆然とつぶやいていると

「おい。」

と後から声がかかった。あ、さっき手をたたいたちゃったんだっけ。
慌てて振り返り、

「…あ…ごめんなさ…」

「いや…悪かったな…。体調が戻ってから、話を聞こう。

それまではこのリュイに全ての世話を一任しよう。私の乳母だ、信用していい」

「かしこまりました、ばつちりお世話いたしますわ」

男の後ろで優雅に了解の会釈をするリュイさん。

「そうだ、名はなんという。」

「…えと…羽野由枝…です。」

「ハノユエ…?変わった名前だな…」

「あ、いえ、苗字が羽野で、名前が由枝です…」

「?みよう…?とにかく名前はユエだな」

こくんとうなずくと、

「わかった。ではユエ。ゆるりと休むがよい、足りぬものはリュイに伝えればよい、ではな」

そう言い、その人は出て行った。

あとに残った女の人は出て行くのをおじぎで見送ると、振り返ってにっこり笑った。

「ユエ様ですね、わたくし、リュイと申します。なんでもお申し付けくださいませ」

「…はい…」

出て行ったドアをぼーっと見ながら、答える。

「湯浴みしましょうか、お召し物を用意してまいりますね」
そういつてリュイさんも出て行った。

静かな室内。

なんだかわからないけど。

なんでだかわからないけど。

体が動くようになった。

優しく笑って話かけてくれる人もいる。

正直、信用とか全然してない。

人は、笑顔でも嘘をつける生き物だから。

でも、とりあえず、ここはあの冷たく無機質な病院じゃなくて。

私の体は、思うように動く。力はある入りらないし、歩けるかはわからない。

でも、ちゃんと反応して動く。

それだけで本当に

幸せだとそう思えるの。

04 幸せ（後書き）

登場人物3人目、リュイさん。殿下は名乗りもせずにフェードアウトです。

ユエちゃん、まだ混乱中だからおとなしいですね。

05 少しずつ…(1)

リュイさんが戻ってきて、お風呂に入ることになった。

ベッドから降りて、歩いたときは本当にこれまた感動して涙が出た。なんだかバランスがとれなくて、少しよろけてしまったけど、リュイさんが慌てて支えてくれたので、倒れずにすんだ。

部屋に備えつけの浴室があり、湯船もあった。

リュイさんがお手伝いするというのを必死に断ったが、足元がふらついていたので

だめです。と押し切られてしまった。

布を巻きつけたまま、少しずつ泡立てた石鹸で洗われていく。

久しぶりにみた自分の体は確かに痩せまくっていた。

アバラ浮いてる…うえ。

腕も足もちよつとキモイぐらい細い。

リュイさんが時折痛ましそうに、涙ぐむのでなんだか

「ごめんなさい」

と謝ると、

「いえ…ぐすつ…お嬢様、このリュイになんでも仰られてくださいましね」

と言ってくれた。

なんだか、素直に嬉しいなあって思えた。

「…ありがとうございます。リュイさん…」

「まあ！さんだなんて！呼び捨てでいいんですよ！」

「そんな、年上の方を呼び捨てにはできません…」

「まあまあ〜徐々に呼び捨ててくださいね」

「えー無理ですよ…」

ふふつと少し笑うと、リュイさんがびっくりして、また涙ぐんだ。

その後、いい匂いのする石鹸で全身を洗われ、いい匂いのする香油を髪やら肌やらに塗りこまれた。

お風呂を上がったて、ふわふわのタオルで拭いてもらい、真っ白なノースリーブのワンピースを着せられた。ゆったりしてるので、ガリガリなのも目立たない。

これまた豪華な鏡の前に座らされ、髪をタオルで拭いてくれる。

「乾かしますね」

そういつて、手で髪をとかしていく。

すると、髪から湯気がほんわり上がった。

「…！」

驚愕に目を見開いていると、

「どうされました？」

「髪の毛…手で乾かしてるの…？」

「？はい。少しですけどわたくし魔法が使えるんですよ」とにっこり微笑まれた。

ええー！！ここにきて魔法！？

なんか…昔読んでたファンタジー系の小説みたいだな…

「あの…魔法って誰でも使えるんですか…？」

「ユエ様のお国では、魔法士がいなかったのですね。魔法は魔力があるということが前提ですが、

大抵は学校にいたり弟子になったりして習います。私も学校に行っていましたねえ」

「そうなんだ…」

無表情だったけど、心の中ではすごいー！なんかファンタジー！と感動していた。

そうこうしている間に髪はほかほかになり、入院生活で伸びっぱなしだった長くて痛んだ髪も

香油のおかげで艶を取り戻していた。

少し切りそろえる事になり、本当はボブくらいにしたかったけど、リュイさんの猛反対で腰の長さで落ち着いた。

「それにしても綺麗な髪ですね。瞳も…黒なんて珍しいですわ」

「そうなんですか？」

「ええ、今までお一人しかお目にかかったことないですわ」

「そんなに…私の国では、みんなそうでしたけど…」

「そういえば、ユエ様はどこのお国からこちらに来られたのでしょうか？」

「え…日本って…わかります？」

「?…ニホン…?」

だよねえ…明らかに現代っぽくないもんね…

ここは忘れたことで行こう、うん。

「えと、あんまり詳しくは覚えてなくて…ごめんなさい。」

「あついえいえ！殿下もゆっくりしてからと仰っていたのに申し訳ありません！」

「そうだ…あの…殿下って…」

「そうですね、殿下ったらお名前も仰ってないのでは？」

「はい…お名前をきいてもいいでしょうか？」

「ええ、では少しお茶をお飲みになりながらお話ししましょうか」

にっこり笑うとリュイさんは、手をとって、備えつけの可愛いテーブルにエスコートしてくれた。

飲み物を準備しているのを観察する、全ての動きに無駄がなく優雅だ。

余計なことを話さず、他人の動きを観察する。

その人の癪に障らないようにじっとしておく。
すっかり癖になってしまった。

カチャリと美しいカップを差し出される。

薄茶色の液が入っている。紅茶かな…

口をつけてみると、香りが口いっぱいに広がってとっってもおいしかった。

「おいしい…」

「お口にあってよかったですね。気持ちを落ち着けてくれるハーブのお茶です。」

なんて気が利くんだろう。

いい人値がまたアップです…リュイさん。

05 少しずつ…(1) (後書き)

ちょっとユエの容姿をねじこんでみました。

さりげなく人物を紹介するのがてむつかしいですね。

今まで読ませていただいた小説を書かれている方々を尊敬するこのごろです。

06 少しずつ…(2)

「さて、殿下の事でしたわね…」

一緒にお茶をと勧めたけど、それはできませんので優しく断られた。

でもせめて座って欲しい、落ち着かないからとお願いすると、やっとリュイさんは座ってくれた。

「私は殿下も仰られていたように、乳母をしておりました。

殿下のお名前はフィル・デルフィア様。このリストレア国の第2王子です。」

「！…おうじさま…？」

「ふふ…はい。」

「私、手を叩いちゃった…王族の手を叩いた…不敬罪…死刑…？」

「！いえいえいえいえ…お嬢様…そんなことないですから！」

うつろな目でつぶやいた私にぎよっとするリュイさん。

「殿下は外では厳しく振舞っておられますが、本当は心の優しい方なのです。

ユ工様を城の外堀の泉で見つけられたときも、ずぶぬれになって抱え上げて、お帰りなさって。

『俺のせいで気を失った、丁重に手当てを！』と慌てておいで私どもは本当に驚いたのですよ」

にこにこリュイさんがおかしそうに笑う。

「あの人が…。あの…あとできちんとお礼を言いたいんですが…。」

「はい、お取次ぎできますようにお伺いしてみましようね」

「…あの…あの…どうして、そんなに優しいんでしょうか？仮にも王子様ですよ」

、私、不審者じゃないですか？こんな、名前以外なんにも話していないのに…！」

うつむいて、ワンピースを握り締める。

「殿下がお連れになったのです。殿下はとても警戒心の強いお方で特に国政を

担い始められてからはお心を許す相手などそういなかったのですよ。

殿下がお連れになり、気にかけていらっしゃる、使用人である私達は殿下のお心のままに。

というわけです。それに、私自身、ユエ様が悪い方とは思えませんが、

私の娘が生きていたらユエ様ぐらいなのかしらと思ったら、なんだからとても愛おしくて」

少しはにかみながら、そう語るリュイさんがとても優しくてあつたかくて、また泣きそうになった。

あたし、前の世界？で泣くなんてありえなかったのに…ここにきて泣いてばかりだわ…

「リュイさん、ありがとう。私…私は…あの…」

どこからどこまで話せばいいのか、この暖かな人の気持ちに応えられなくなったけど、

暖かな人になんて触れたことなかった私は、どう接して返せば、応えられるかわからなかった。

楽しい話じゃないことは確かだから言ったら優しいこの人を悲しませるかもと思ったら

余計に言えなくなってしまった。

「ユエ様…？私のことも少しずつ知ってくださいませ。そしてお話できるときが来ましたら

話して頂けたらとても嬉しいですわ」

その心遣いがとても嬉しい。
だから、私も…

「……はい。ひとつだけ…私、3才で両親を亡くしました。だからお母さんってわからなくて

でも…もし、いたら、リュイさんみたいにあったかい人だったらいいなって…思ったの…

優しくしてくれて…ありがとうございます」

感情が高まっつつまりながらだったけど、感謝を伝えることができたかな…。

リュイさんは涙目になりながらも、

「とつても…光栄です…。ユエ様」

とつて、優しく抱きしめてくれた。

06 少しずつ…(2) (後書き)

ユエ、ちょっとかちかちの心がやわらかくなってくれたかなあ…

07 出会い(1)

私がお城に来て、4日がたった。

相変わらず、王子様へは会えてなかった。なんでも隣国とイザコザがあつてそれを治めるために

第2王子であるフィル様が出向いているとの事だった。

フィル様とリュイさん以外知り合いもない私は、ほとんどを部屋の中で過ごした。

体が動くようにはなつてたけど、体力がほとんどなくて、歩けば貧血でふらついてしまう。

ご飯も食べやすいようにリュイさんが料理長と相談して出してくれてるみたい。

おかげで少しずつ食べる量も増えてきて貧血も減ってきた。本当にありがたい。

リュイさんには色々と、この世界のこと、この国のことを教えてもらった。

この世界には、中くらいの国がいくつも隣り合っており、それぞれに発展をみせている。

数十年前は領地を争って戦争もあったようだけど、今はそれぞれに個々を伸ばしてお互い協調して行こう！という素晴らしい考え方が主流でどの国も国交を深め合い仲良くしているんだって。

なんて素敵すぎる考え方。

現代もこうあればいいのになって思うよ。

そしてリストラアがこの国の名前。中の上くらいの大きさの国で、商業が盛んな国のようだ。

城下には、いろんなものが流通しており、人々の出入りも多く、活気のある街が広がっている
とのこと。いつか行ってみよう。

なぜか言葉は通じているけど、文字はさっぱりわからなかった。

英語まではいかないけど、アラビア語のような象形文字！て感じの文字でなかった

だけ、ほっとした。

リュイさんにお手本を書いてもらっておいて、何度も書いたり読んだりして練習するのだ。

簡単な絵本も読んでいる。

今日は天気がいいので、バルコニーで、書き取りの練習をしている。
リュイさんは今日の夕食を料理長と打ち合わせに行って一人。
夢中になって書き取りをしていたら、ふいに強い風がふいた。

「あっ」

紙が舞い上がって、何枚か飛んでいってしまった。

慌てて下を覗き込むと、花を植えてある花壇にひっかかっているの
が見えた。

誰も下にはいないようだ。

よし、取りに行こう。

本当に深層の令嬢じゃあるまいし、こんなことまでリュイさんに頼
んだら悪いもん。

方向音痴じゃなかったと思うし、さっと拾って戻ってくれば大丈夫

大丈夫！

ドアを開けて左右を見たけど誰もいない…

まあ、いつか。

出発ー！

07 出会い(1) (後書き)

というわけで、ユエ、お部屋脱出です。

08 出会い(2)

なんとなく階段を降りて、ウロウロしていると、なかなか外への出口が見つからない。
仕方なくメイドさんに聞いてみる。

「あのー、すみません」

「はいい!!」

「え?…えと…」

「あ、失礼いたしました!どうされましたか?」

「外へ…花壇のあるお庭に出たいんですけど、出口がわからなくて

…」

「あ、こちらです!ご案内いたしますね!」

「ありがとうございます」

親切なメイドさんだあ。あたしよりちょっと年下かな?

元気のいい子だ…

などと考えていると、そのメイドさんがちらちらとこちらを気にしている。

「あの…あたしに何か…」

「い、いえ!その!殿下のお連れになつた方ですよね!?そ、その噂になつてて!」

気になつてしまつて…ってああすみません!失礼なことを!!

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!」

「あ…あはははー…いえいえーお気になさらず…」

なんて素直な子!ていうかわかりやすい子!

噂になつてたのかあ…まあ、リユイさんから聞いた話じゃ

ずぶぬれで連れてきたらしいから、そりゃ目撃証言もたくさんでしょうね…とほほ。

「あの、その、私ニーナと申します！何でも言いつけられてくださいねっ！」

「あ、ありがとうございます。私はユエです。しばらくの間よろしくね」

「はい！ユエ様ですね！よろしくお願いいたします！あ！花壇こちらですよっ！」

大きく開け放たれたガラスの大窓、ここから出入りしていいみたいだ。

「ありがとうございます、えっと、ニーナさん？帰りは大丈夫だから」

「そうですか？私のことはニーナとお呼びくださいね！では、失礼いたしますっ！」

「はい…それじゃあね〜」

ものすごく元気のいい子だった…なんだか元気吸い取られたような気が…

まあ、それはいいとして。とりあえず目的地に到着したからおっけい。

えと、紙はどこかな…

あつたあつた。

2枚拾って、あと1枚が見つからない。

花壇に沿って探してみる。

ガサガサ…

「ないよ〜、3枚は飛んだはずなのにな〜」

「なにかお探しですか？」

ふいに後から声が聞こえた。しかも男の声。

瞬間的に鳥肌が立った。さっと身を翻して後方確認。

そこには、簡素な上下に身を包んだ、引き締まった身体の長身の男が立っていた。長剣を腰にさしている。

短く刈った銀髪に切れ長の瞳。

美形さんですねー。

「？どうされました」

あわわ、じつと見過ぎちゃった。

「い、いえ。大丈夫ですのでお気になさらず」

思い切り目を泳がせて言うと、ぷつと笑って

「思いつきり、ないよ〜って言ってるの聞いてしまったんですが…」

「ああ、私は騎士団副団長のクレイ・アーノイドです。怪しいものではありませんよ」

「あ…そうなんです。私はユエと申します。わけあってお城に滞在させてもらっている者です」

「ああ、フィル様がお連れになった女性でしょうか？」

「本当に噂になってるみたいですね…その女性で間違いないと思いますよ」

「へーあなたが…」

じつと見られてちょっと居心地わる…

「それでは、失礼しますねー」

立ち去ろうとすると、

「ちょっとお待ちください。探し物はみつかったのですか？」

「…もう少し探してみるので大丈夫です」

「私も一緒にしますよ」

「いえ、そんな副団長さんなら忙しいんじゃないですか？」

「今日、休みなんで。自主鍛錬した帰りだったので、もうあと暇です」

ちっ

空気読めない男ね。

てか、ちよつとずつ近づくのやめてよ。

あんまり近くだと困るのよ。

「じゃあ〜そっち探してもらえます？紙1枚なんですけど、すいません」

「はい！了解です！」

にこつと笑って探しに取りかかるクレイさん。

うつ…距離離そうと思って探し終わった方向を言ったのに、そんな素直に…

なんか心が痛むんですけど。

ガサガサ…

「ふうーないですねえ」

「…はい…う…」

久々の外で疲れたのか、少し貧血をおこしてくらりとしてしまっ。

「大丈夫ですか!？」

とっさに腕を引いてくれた。でも。

男の手。

「いや！」

振りほどいて、掴まれた部分を握り締め、芝生の上に座り込む。

「す、すいません！痛かったですか！？」

「あ…ちがいます…ごめんなさい…」

どうしても男の人の大きな手が怖い。

体に電気が走るみたいにびりってきて、過去を思い出してしまう。
忘れろっておもってるのに…くそっ

「休んでください、探してきますから！ね！」

「…いえ！もういいですよ、もしかしたら2枚しか飛んでなかったのかも」

明るく笑って答える。

この人はいい人っぽいのに申し訳ない。

「差し支えなければ…何が書いてあったんですか？」

「文字です」

「文字？」

「私、読み書きが出来ないので教えてもらっていたんです。

せっかくリュイさんに書いてもらったお手本だったので、探さなきゃと思っただけです…」

「大事なものじゃないですか、もう少し探しましょう！」

「いえ、もう…あ…！」

ふと見上げた視線の先、木の枝に引っかかった紙が見えた。

「ありましたね！よかったじゃないですか！」

「でも…あんな高いところ無理ですよ…諦めます」

リュイさんには後で謝ろう…

「私に取りますよ？」

「え、どうやって」

手の平を木の方向に向け、にこっと笑うと

「お静かに。『風よ』」

彼が呟くと、風がざあっと動き、紙が引っかかっている木を揺らした。

紙はひらひらと落ち、彼の手の中に納まった。

「はい、どうぞ」

初めて魔法っぽい魔法を目の当たりにした。

「すごい…」

「全然すごくないですよ、今は初級くらいだし。

それよりよかったです、やぶけなくなつて。

細かいコントロールは結構苦手なので」

「ふふ…クレイさんありがとうございます」

ははっと笑って頭を掻く彼に、思わず私も少し笑ってしまった。

それから、部屋まで送ってもらい、心配していたリュイさんにちょっと怒られた。

心配してくれる人がいるっていいなあなんて思ってるって知られたらもっと怒られそう。

黙っとこう…

08 出会い(2) (後書き)

どうやら私は会話メインが書きやすいようです。
読みにくいかなあ…

まあ、いいか。自己満足に近い小説だし。うんうん。

今日はフィル殿下が戻る日なんだって。

朝からリュイさんがはりきりまくってるのよね。

「さあ、次はドレスを選びましょう!」

「リュイさん…そんなにはりきらなくても…」

「だーめです! やつとご飯も食べれるようになって健康的になったんですから、

リュイがどんな思いで…くどくどくど」

だめだ…始まってしまった…

「リュイさん」

「はい?」

「お願いしまーす」

「まあ、お嬢様、お任せくださいませ、このリュイが腕によりをかけて…」

とほほ…

たっぷりと時間をかけて、リュイさんの思うままに仕上がっていく作業。

途中何度かうとうとしてそのたびに

「お嬢様! あと少しです!」

とはげまされた…。

コンコン

「入れ」

「失礼いたします」

ちゃんと挨拶するの初めてだから緊張するな…
それに礼儀的なのも…相手王族だよ…
うう…

久々に見たファイル殿下は、執務机で白いシャツにズボンというラフな格好だった。

というかちゃんと挨拶どころか見るのすらはじめてかも…

やばい、改めてみるとかなりの美形さんだわ…
ファンタジーの主要登場人物ってなんで美形なの？ずるい！
って、挨拶しなきゃだ！

「あのっ！えと…ファイル殿下、お疲れ様でした。あの、私きちんとお礼をいってなくて…
ほんとにその……。？…殿下？」

「……………」

なに…この沈黙は…めっちゃ…見られてるう…

「…お前」

「あ、はいっ」

「いや、悪い…。お茶でも用意させよう。リュイ」

「はい、かしこまりました」

なぜだかいつもより笑顔のリュイさんの準備であっという間にお茶の席が出来上がった。

「まあ、座れ」

「…はい」

「体の具合はどうだ。」

「はい。リュイさんや料理長さんがおいしいご飯を食べさせて下さって、

貧血も減ってきたし、起きていても大丈夫です。」

「そうか…よかった…」

にこりと微笑んだその顔に一瞬どきりとした。

いやいや…美形のふいの笑顔ってすごい迫力だな。

「その、よければお前のことを聞きたいのだが…」

「あ、ですね。まずはお礼を申し上げます。」

こんな不審者まっしぐらな私を拾ってくださいあってありがとっござい
いました。

「ご飯もお洋服も…本当に感謝してます。」

働いて必ずお返しいたします！」

勢いよく再び頭をさげる。

「いや、必要ない。俺がお前を驚かせて気を失わせたのだから」

「いえ！それは私が勝手に気を失ったのに…お手を煩わせてしまつて重ね重ね…」

「もうよい。謝罪は飽いた。それより、お前のことを聞かせてくれないか？」

「そうなりますよね。うん。どーしよー」。

「言ったところでどうなるのかなあ…。でも、私を助けてくれた人だもん。全部ちゃんとお話してみようかな…」。

「長くなります」

「構わない」

「信じてもらえないかも」

「信じよう」

「怪しさ増しますよ？」

「大丈夫だ、許容できる器と力はある」

「そーですよね…では…」

「じゃあ、聞いてください」

それから私はフィル殿下に話した。

私のいた世界のこと。

両親がいないこと。親戚の家でのこと。

事故のこと。火事のこと。

こちらの世界に来て治った身体の事。

きつともう私の世界には戻れない気がする事。

時折、質問が挟まれたものの、あいづちを打ちながら最後まで聞いてくれた。

「…これで全部です…」

ふうと息をはいて、ぬるくなったお茶を飲み干す。

もうちよつと欲しいかも。

「リュイさん、お茶を…ってリュイさ…」

聞いて欲しいと横にいてもらったリュイさんが号泣している。

真っ白なメイドエプロンをぐしゃぐしゃにして、顔をおおって泣いている。

「っあんまりです…お嬢様…！その人たちは！なんて方々なのでし
よう…！」

「リュイ」

「申し訳ありませんっ殿下…」

「よい、顔を洗ってこい…」

「…はい…失礼…いたします」

呆然と立つ私に

「ユエ…その、色々とつらかっただろう…」

「…はい…」

「その…男嫌いというのは…その男たちとの事が原因なのだな…」

「…はい…、男の人の手が…怖いんです。優しい人だとわかっていても、

男の人だと認識しちゃうと体が拒否反応起こしちゃって…

だから、最初に殿下が手を伸ばした時も、おぼれたのは私のせいなんです！

殿下のせいでは…ないんです」

殿下は少し長い前髪をくしゃりとさせて片手で顔を覆っていた。

「あの…殿下？…その、だから私の事に責任を負ってもらわなくても大丈夫なんですよ。」

その、ご迷惑だったら、すぐにでも…」

「違う！」

びくりと私の肩がはねた。

「…あ…すまない」

「…いえ」

「私は…迷惑などと思っていない。今は、お前をそんな目に遭わせた男達への怒りを…
抑えていたのだ…」

「…あ、そうだったんですか…」

「……………何度も言うが、お前のことを迷惑などとは思わない。もし、お前がいいなら、これからもここにいてもらってかまわぬ。」

「っえ！」

「いや…お前がいいならだぞ…」

「いえ！驚いちゃって…私、なんの役にも立たないから…あ、でもお掃除とかお洗濯とか…」

「そんなことはしなくていい、そうだな…時折、私の話し相手になつてくれ…」

「…そんなことでよければ、ありがとございます、フィール殿下」

こうして、ようやくフィル殿下にお礼と、本当のことを告白できた
私は、

殿下のお話相手として王城に住まう事になったのです。

09 (後書き)

ってわけです。

ちょっと無理やり…

でもフィル殿下が優しいの伝わりますよね…？

10 (前書き)

*9話のフィル殿下視点です！。

やっと帰ってこれたな…

まったく、コーネルのやつのおかげで滞在が伸びたではないか。

堅苦しい正装をばいばいと脱いでいく。

シャツとズボンまで脱いで執務机に体を沈める。

「フィル殿下」

「なんだ」

執事のヴィオが座ったと同時に声をかけてくる。

幼馴染のこいつは、仕事がとんでもなく出来るが、とにかく遠慮がない。

「本日の日程ですが」

「…ああ」

「昨日申し上げた日程に修正がございます。」

「…なんだ。」

「殿下が拾ってきたあの娘が、お目通りを希望しております。」

「…なに？」

「体調もよくなったようですし、もう城下に放たれてはいかがですか？

いくらこちらに過失があったとしても、出自もわからぬ娘を王城にいつまでも

置くのはどうかと…」

「…ヴィオ。あの娘に関しては何も言うなと言わなかったか？」

「しかし、私は殿下の事を思っ…」

「何度も言わせるな、お前はそんなに無能だったか？」

嘲笑を交え、言葉を吐く。冷気を纏った俺にはヴィオも何も言わない。

「失礼いたしました。それでは、会議よろしくお願いいたします。」

まったく、動じない奴だ。

子供のときはもっと表情豊かなやつだったんだが…

しかし、あの娘とやっと話せるな。

「よし、まずは風呂だな…」

コンコン

「入れ」

「失礼いたします」

招き入れた娘は、見違えるように美しくなっていた。

細すぎた体は全体的に少し丸みを帯び、肌は輝いている。

リュイの見立てか、白いドレスが似合っている。

「フィル殿下、お疲れ様でした。あの、私きちんとお礼をいってなくってその……殿下？」

首をかしげれば、動きに合わせて艶やかな黒髪がさらりと揺れる。控えめにされた化粧のせいではないだろう、頬はつつすらとピンク

で、小さな唇は瑞々しい。
何といても、その瞳が、吸い込まれそうだ。
この世界では、黒という色は大変貴重なものだ。
その色を、2つも持っているこの娘は…

「…お前…」

「あ、はいっ」

はっ、俺としたことが見とれてしまっていた…。

「いや、悪い…。お茶でも用意させよう。リュイ」

「はい、かしこまりました」

「まあ、座れ」

落ち着いたところで、洪る娘に先を促し、話を聞いた。

「…これで全部です…」

言い終えた娘の瞳はまっすぐに俺を見ていた。
嘘など決してまじってない。
そう感じ取れた。

乳母のリユイが号泣している。
無理もない。

俺だって、怒りで震えそうだ。

この華奢な娘に男2人がかりで無体をしいたなど、
許されぬ。

出来るならば、この俺が首をはねてやりたい…

この怒りを抑えるために顔を覆う。

今の俺の形相はどうなっているのか、見せたら娘が怯えてしまつか
もしれない。

「あの…殿下?…その、だから私の事に責任を負ってもらわなくて
も大丈夫なんですよ。」

その、ご迷惑だったら、すぐにでも…」

「違う!」

大きな声を出すと、娘の細い肩が跳ね上がった。
俺としたことが…

迷惑などと思っはすがない。

城にいていいといった俺に、

「ありがとうございます」

と娘は少しだけきこちなく微笑んだ。

俺は…

俺はあの泉でびしょぬれで、涙に濡れたお前を見たとき…

泉の女神かと本気でそう思った。

あの姿が目には焼きついて離れない。

きっと心を奪われてしまったのだ…。

王族として一人の人間に固執すべきではないとわかっている。

だが、俺の元で、何にも怯えることのない満ち足りた生活を送らせてやりたい。

自分の人生を幸せだと思って欲しい。

今は少しだけしか笑わぬ娘が心から笑ってくれればいいと、そう思う。

10 (後書き)

フィル殿下すっごいいいい人なんですよー
一目ぼれだったのね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382t/>

欠け月を埋めるように

2011年8月22日20時40分発行